

## 民間生薬検定試験〔上級〕問題

受験番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

問題1 次の生薬の読み方をカタカナで表に記入し、その原植物をA欄から、科名をB欄から、成分をC欄から選んで空欄に記入しなさい。該当するものが無い場合は×を記入しなさい。

|     | 読み方    | 原植物 | 科名 | 成分   |
|-----|--------|-----|----|------|
| 細 辛 | サイシン   | 1   | 8  | **** |
| 呉茱萸 | ゴシュユ   | 3   | 7  | 3    |
| 辛 夷 | シンイ    | 4   | 6  | **** |
| 茵陳蒿 | インチンコウ | 11  | 11 | 2    |
| 沙 参 | シャジン   | 6   | 5  | **** |
| 淫羊藿 | インヨウカク | 8   | 3  | 4    |
| 益母草 | ヤクモソウ  | 9   | 2  | **** |
| 槐 花 | カイカ    | 10  | 1  | 1    |

A欄 1 ウ斯巴サイシン、2 キハダ、3 ゴシュユ、 4 コブシ、5 スイカズラ、  
6 ツリガネニンジン、7 サラシナショウマ、8 イカリソウ、9 メハジキ、10 エンジュ、  
11 カワラヨモギ、12 ナツメ、13 クララ、14 ニガキ

B欄 1 マメ科、2 シソ科、3 メギ科、4 ユキノシタ科、5 キキョウ科、6 モクレン科、  
7 ミカン科、8 ウマノスズクサ科、9 バラ科、10 リンドウ科、11 キク科、  
12 スイカズラ科

C欄 1 rutin、2 capillarisin、3 evodiamine、4 icariin、5 matrine

解説：生薬名は薬局方ではカタカナで表示されるが、実際には漢字で扱われることが圧倒的に多い。書くことは難しくても正しく読めることは必須となる。生薬名－植物名－成分の関係は生薬理解の上での基本であり、植物を知ったら必ず科名を確認する習慣をつけたい。

問題2 次の部位を薬用とする植物を問題1のA欄から選び、その番号を〔 〕内に記入しなさい。

花・蕾 \_\_\_\_\_ 〔4 〕、〔 10 〕ほかに 5  
 果実 \_\_\_\_\_ 〔3 〕、〔 12 〕  
 根 \_\_\_\_\_ 〔6 〕、〔 13 〕  
 根茎 \_\_\_\_\_ 〔7 〕  
 茎・葉または地上部 — 〔5 〕、〔 8 〕、〔9 〕ほかに 11  
 木部（材） \_\_\_\_\_ 〔14 〕

解説：生薬の基原はふつう原植物とその部位（及び調製法）で定義される。部位によって成分も異なり、規定された部位以外の混入が禁じられている場合もある。

問題3 下記の文の空欄に入れるべき適語を、a～eの解答欄に答えなさい。

1. 被子植物において、[a]はその内部に胚珠（受精して種子となる）を包み込んで雌蕊を構成するが、aの数はふつう子房の横断面を観察することで判断できる。
2. キク科やキキョウ科の植物では貯蔵物質として[b]を含み、ヨウ素デンプン反応は陰性である。
3. 芽は一般に茎や枝の頂端または葉腋につき、芽が展開したものを[c]という。cの先端部には分裂組織があり新しい茎（枝）や葉がつくられる。
4. 植物にはしばしば不溶性の[d]カルシウムが含まれ、その結晶形や分布はその植物の特徴となりうる。
5. 葉身が1枚ではなく、複数に完全に分裂した葉を複葉といい、エンジュは羽状複葉、イカリソウは2回[e]複葉である。

解答欄 a [心皮]、b [イヌリン]、c [シュート]、d [シュウ酸]、e [三出]

解説：植物を利用する上で、花の成り立ちやその基本構造を理解することはとても重要。その理解は生薬を学ぶ上で不可欠というだけでなく、生活に潤いを与え人生を豊かなものにしてくれます。

問題4 次の文の【 】には適語を入れ、〔 〕内にはA欄から適語を選んで番号を記入しなさい

- a 黄蜀葵はアオイ科植物の【トロロアオイ】を基原とした生薬で、〔4〕を含み、民間では〔10〕に用いられる。食用のオクラは同属植物である。
- b 大棗は【ナツメ】を基原とする生薬で、zizyphus saponinなどが含まれ、味は〔1〕。〔9〕としての作用をもつ。
- c 黄柏は【キハダ】を基原とする生薬で、アルカロイドの【ベルベリン】を含み、〔11〕などに配合される。染料や外用薬としても利用される。
- d 【ショウマ】はサラシナショウマなどを基原とする生薬であり、化膿性の腫物などによく用いられ、しばしば〔8〕に配合される。

A欄 1 甘い、2 苦い、3 辛い、4 多糖類、5 サポニン、6 フラボノイド、7 アルカロイド  
8 痔疾患薬、9 精神安定薬、10 咳やのどの痛み、11 苦味健胃薬、12 中枢興奮薬

解説：生薬は「クスリ」であるからにはその薬効の理解は不可欠ですが、古典で伝えられている薬効と、動物実験上での生理活性が混在していて複雑です。はじめは大まかに、その生薬の薬効の方向性を確認しましょう。